

ご支援を頂いたことに、この場をお借りして感謝申し上げます。

10月17日のオープニングセレモニー、18・19日のコンフェランスでは3セッションで各々のキースピーカーと合計21名(12カ国)のプレゼンテーションがなされた。2日間であり広げられた議論の特徴は、第1回北京大会と共通している点が幾つか見られた。

(1) 従来のアーカイブズと電子情報化時代のアーカイブズとの両者の関係にからむ問題。

(2) 肉声の届かぬ、顔の見えない遠隔地教育の課題。

(3) 2年前のフィリピンや今回のパプアニューギニアにも、そして日本にも独自の課題があり、アーカイブズ制度やその課題は、画一的ではなく、地域差や、国の歴史や文化の差を大いに持つこと。

これら3点などは、第1回・第2回共通する課題であった。

それとは別に、今回の顕著な特徴と筆者に感じられたのは、それが大会のテーマ「電子時代におけるアーカイブズ学研究とアーカイブズ学教育」であったり、公開講演会テーマが「記録の未来—電子時代におけるアーカイブズ学を考える—」であったのだから、当然とも言えるが、電子情報化時代のアーカイブズの方法も制度も、どの国においても深刻な課題として認識され、その問題に取り組んでいる報告がなされていたことは印象的であった。大会テーマの設定が成功した、という見方もできようが、ここで申し上げたいのは、電子時代への大きな時代転換をイギリスもオーストラリアも中国も韓国も、例外なく認識して、その対応策に真剣に取り組んでいるということである。

日本の多くの人びとは、この深刻な課題のどこに深刻さがあるのか気が付いてはいない。何となく、不安を予想してはいるが、真剣な危機感ではない。深刻な課題とは、技術が可能かどうかという問題ではない。アーカイブズ制度やアーカイブズ理念やその価値観が滅

総括 一わが国のアーカイブズ学を考える

学習院大学文学部
高埜 利彦

2年前の2004年、第1回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議(以下APACEと略記)の北京大会に参加した私ども(安藤正人・斎藤佳郎・保坂裕興・安典久と筆者)は2年後の第2回APACEの東京開催を約束し、以後2年間多くの仲間とともに実行委員会(委員長高橋実、副委員長青山英幸、委員12名)を通して準備に取り組み、この大会を成功させることができたことに安堵している。この間、多方面からのご協力を頂き、全史料協からも

びるかもしれない、という危機感が各国の先端的アーキビストには感じられた。日本には、そもそもアーカイブズ制度もほとんど浸透しておらず、人びとの間にアーカイブズ理念も、価値観も、その前提になるデモクラシーも稀薄なのであるから、危機感を持つことも、深刻な課題として受けとめることも、しないのは当然でもある。

中国では、千年以上も続いた青銅器時代を経て鉄器時代を迎えた。日本の弥生時代に、列島の各地の豪族は中国との交渉を持ったが、彼らは青銅器と鉄器を同時に導入することになった。

現代の日本は、伝統的なアーカイブズ学という青銅器と、電子情報化時代のアーカイブズ学という鉄器とを、同時に導入する難しさを味わっている。青銅器から鉄器にとって代られたという流れを知っている私たちは、それなら電子情報化時代のアーカイブズ技術だけを学び、取り入れれば良いではないか、という声が出るかもしれないが、ことはそれほど簡単なことではない。なぜなら伝統的なアーカイブズの理念を持たなかった日本では、コンピューター世界というモンスターに飲み込まれてしまうであろうから。

ごくごく一部のアーカイブズ理念を理解している者を除いて、政治家はもちろん、公務員や企業勤務者などの大部分は、電子情報となっている記録を保存・管理して真正なアーカイブズにしようとは考えていないだろう。コンピューターを通したヴァーチャルな世界を飛び交っているだけの情報記録を、この先未来に真正性を保証する形で保存することは可能なのであるか。もし改ざんされることなく電子記録が残されたとしても、その記録資料が真正であることを認証されなければ、証拠としての効力を持つこともできず、従って説明責任（アカウントビリティ）を果すこともできなくなる。

現在、世界各国のアーカイブズ関係者の間で、深刻に取り組まれだしているこの問題を、日本の政府・行政・企業などは立ち遅れた状

態に止まっている。恐らく、とりあえず紙媒体での記録保存を考えなければ、日本は将来各所で記憶喪失状態に陥ることになる。

だから、やはり紙媒体に頼るほかはないのだとの意見が起ってこよう。韓国からのセミナー参加者6人の中の一人が「これからも紙媒体で残すべきでは」との発言を行ったのに答えたカレン・アンダーソンさんは、その議論はすでに解決済みであり、まだその段階にあるのかというような冷たい態度は微塵も見せずに、淡々と諭すように、止めることのできない電子情報化時代のアーカイブズ論の必要を訴えたことは印象的であった。カレンさんの発言を通して伝わってきたことは、電子情報化時代にふさわしいアーカイブズの方法を見出せなければ、将来、アーカイブズ学もアーカイブズ理論も、その精神も、すべて滅びてしまうという考えのように思えた。

青銅器時代が、銅鐸などの痕跡だけを残して使命を終えたように、アーカイブズ理論も使命を終えてしまうのであろうか。この重要かつ深刻な課題に、世界5大陸の賢者100人が集まり、電子情報化時代の記録をいかに真正の認証可能なアーカイブズにするかの方法解明に取り組んでいることが、ルチアナ・デュランティさんの講演から知ることができた。InterPARESと呼ばれるこのプロジェクトの成果に期待をし、その成果に学べる日が来るであろう。

しかしそれが技術的に可能になったとしても、日本社会には肝じんのアーカイブズ理念も価値観も乏しい状態は続いているのである。鉄器という、電子情報化時代のアーカイブズを残す方法を学べたとしても、日本社会が透明度の高い政治や行政を行い、情報の公開を行なう民主主義の理念を共有しなければ、鉄器は宝の持ちぐされになるか、一部特権者の独占物になるのであろう。青銅器時代に学び、日本社会にアーカイブズの理念を定着させる努力は、先端技術習得とともに重要な課題なのである。

この拙文は、総括とは申しながら、筆者個

人が大会を通して学んだ重要点を記したものとなっている。他の参加者はまた別の角度から多くを学んだことであろう。このように受けとめ方や捉え方は個々別々であったとしても、以下の認識は誰もが共通して持ったことであろう。すなわち、各国・各地域に存在する多くの課題に、アーキビストたちが真剣に取り組んでおり、この大会を通してともに連帯することの大切さを認識することができたということである。

公開講演会後の懇親会において、国立公文書館の菊池光興館長がスピーチで「日本のア

ーカイブズ制度やアーカイブズ教育にとって、本大会は歴史に残るものとなった。」と発言されたが、これは参加者の誰もが感じていた思いであった。

(追記)

本会議のチェアマンであったハンス・シュクコーグル氏が2006年12月9日に急逝されたとの訃報が届けられた。ICA/SAEの委員長として本会議に献身されたハンスさんの姿を誰も忘れることはなかろう。哀悼の意を心より表したい。

